成澤寺かわら版

第３号
発行日
平成22年4月7日
発　行
時宗 高階山
成　澤　寺

一遍上人の念仏

『一遍聖絵』という今では鎌倉時代の風物を伝える唯一の貴重な記録があります。

それにはやぐらが組まれ、時宗僧達が念仏を唱えながら踊りを踊っている。その下では牛車に乗ってやってきた貴人、商人、職人、武士、農民たち。長柄をもっている者、あら布でまいた刀を持つ者、弓を持つ者が手に数珠をかけている一幅の絵もあります。

上では僧尼が鉦をたたき、足踏みならし、ただひたすら名号を称えている様は狂っているかのようでもあります。このような踊り念仏をする場合はその場は暗黙のうちに『守護不入』という習慣があり、念仏の場には兵を入れたりしなかったそうであります。ひとえに地獄におちないように聖たちの念仏にすがっている。中にはそれを見る楽しみで取り囲む者もいたでしょう。一遍の念仏は『南無阿弥陀佛の六字の外にわが心身なく、一切衆生にあまねくして、名号これなり』と身も心も南無阿弥陀佛の中に消え果て、その念仏があまねく宇宙に行渡り、生きるものを包み込む。名号の中に我も生き人も生かされていると

お説きになりました。

その念仏の勧め方は小さな紙に『南無阿弥陀佛決定往生六十万人』と書かれたものを人々に渡し、念仏を称えるように勧めたのです。決定往生とは南無阿弥陀佛を称えるものは必ず、往生できるという意味ですが古来より人々は往生できるというお札をもらうことで生きる歓び、生きる力、苦しみや不安を抱えながらそれに負けない安らぎを与えられたのではないかと思うのであります。だから、やぐらの上の僧尼たちは熱狂して踊り、それを見る人々も同じ受け取り方をしてきたのではないかと思います。特に、室町期には時宗は爆発的に教線が拡大したといわれますが、鎌倉時代も含めこのような念仏は革命的なことであったでありましょう。

この一遍上人の大慈悲心は生命力の発露の表れであり、霊的な迫力、熱狂的な情熱に人の心を覚醒させるものがあったのであります。

仏教の教えは一切の衆生を抱きしめる暖かい心から出来てきたものでありますから、その心が一遍上人の教えにも表れていると認識したい。

〈無量光寺・一遍上人〉

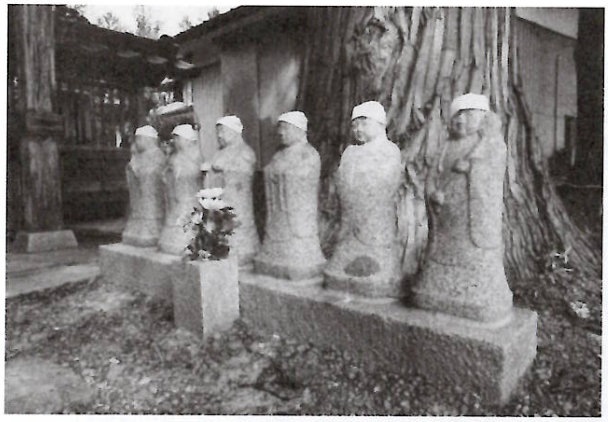
諸相(1) 時宗の御連歌について

二祖他阿真教上人は事実上の時宗教団の形成者、時宗道場の建立者でありますが、連歌の歌人としても知られ、【他阿上人和歌集】には歌人の藤原定家の孫為相が冷泉家の祖であり、真教上人は為相と歌の申し合いを何度も行っております。場所は神奈川県の無量光寺であります。当時、和歌は二条・京極・冷泉の三家があり、二条家は保守的、京極は万葉集などの古い表現を重んじ、冷泉家は自由な歌風を主唱しました。

連歌は滑稽さや機知に富み、転変として自然から人事に、冬から夏に、迷いから悟りに瞬間の変化を味わう陶酔して作をなすもので日本だけに存在する貴重な文学です。

その実際の目的は一つは神仏に奉りその御意を慰めるもの、二つには祈祷のためにするもの。主に戦いの出陣に際し、戦勝祈願をした。今川氏親、織田信長が武田との戦いに勝つために

祈ったもの。徳川将軍の御台所安産祈願。三つには追善のためのもの。特に時宗は宗祖一遍が熊野本宮証誠殿の前で権現から神託をうけたので各武将は時宗の連歌、或は和歌は神がかっているので戦勝祈願に多く用いられ、時宗僧が呼ばれ歌われたもののようです。



たとえば、北条氏康は武蔵野に出陣するに当たり、『柳島という処の松の根に旗おし立てたまひて』歌を残している。何か事を始めようとするときに、連歌または和歌などによって神意を得ようとした。

徳川幕府の時代には、代々の遊行上人が連歌の式に登城して連座していたが正月十一日は上人がお札を作る日と重なり、また家光公の命日とも重なり、二十日に変更された（慶安五年・一六五二）。また、遊行上人の代行として浅草の日輪寺の代々の住職が代参している。

遊行寺宝物館にある室町時代の天神像や渡唐天神図などが保存されているのは遊行上人が連歌を興行されたときに床の間にかけたものであるといいます。

今は、ご本山で十一月中旬より行う一週間の別時念仏の初日に連歌の儀式を行っているのも歳末別時念仏にあたって神意を問うというものからきているのでありましょう。

織田信長公の『日本手に入るけふの喜び』豊臣秀吉公の九州征伐時、小田原退治、朝鮮出兵の出陣時の連歌がある。武将の中でも今川氏が時宗僧を選んでいるのは時衆僧（当時はこの言葉を使用）らには、多くの和歌や連歌の名手がいたからでもあるといわれます。今の静岡、千葉のお寺はこのような武将により安堵されておりますから時代の大切さを感じさせられます。

本山参りをして

根岸　多田　充様

かねてからの念願であった本山のお参りを昨秋十一月八日、連れ合いと二人で行って参りました。

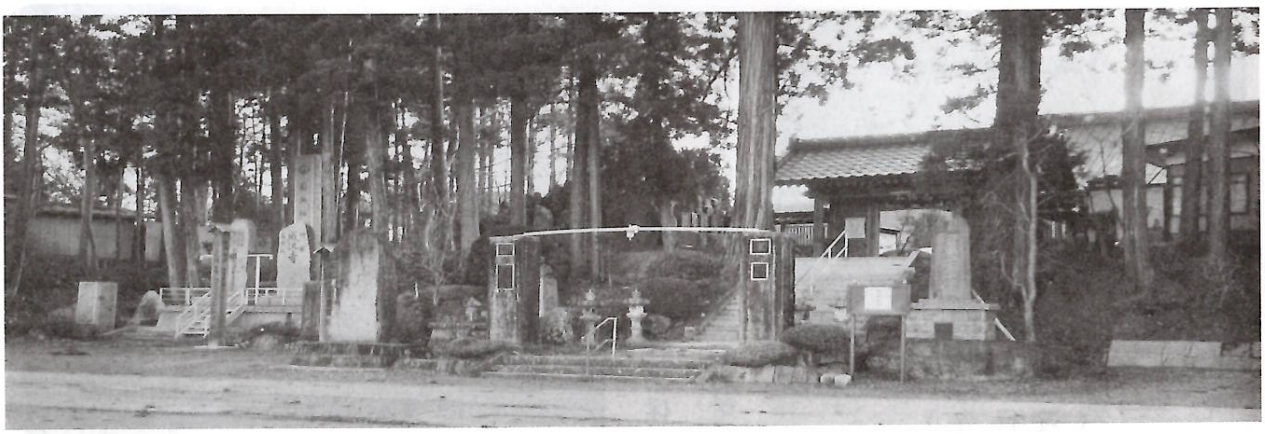
藤沢駅で小田急線の改札に行き、後ろから連れ合いに呼び止められたり、道順は菩提寺の住職様から北口だよと教えられて

〈遊行寺〉

いたことを忘れ、また一つ通りを間違えてちょっと遠回りをしましたが無事到着いたしました。遊行寺には、十数年前に鎌倉旅行の折、偶然に遊行寺入り口と案内板を目にし、入りましたら畳三拾畳あるいはそれ以上だったか大変広い畳敷きの講堂みたいな大広間だったと記憶しております。入ったところは今考えると裏口だったような気がします。

普段は、トンと仏壇にも手を合わせることもない不精をしております。日頃の罪滅ぼしにもと思い、また御先祖様、両親の供養と倅のお嫁さんも決まり、報告がてらのお参りでした。

受付を済ませ、寺務所から広い廊下を通り、お茶会などを催しているお母さん方を見ながら拾数段の階段を登り、位牌堂に案内され、三人の和尚さんにお経を上げていただきました。なんか緊張感が漂い、すがすがしい気持ちになり、心が晴れた気分になりました。

本山を辞しながら、庭を見回したら、一尺あまり以上の大木を目にし、見たこともない庭木だなと思ってよく見たら金木犀でした。それが何本もあり、あまり見事な大木の金木犀だったので幹を撫でてまいりました。

生きている内にもう一度ご本山のお参りをと考えております。